

史 談

2014 (H26) 2. 13

新年最初の会報です。遅くなりましたが、新年おめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

■ 研修会



放射性炭素年代測定法調査の結果、深山観音の千手観音菩薩像は平安時代にまで遡る像である可能性が自然科学的に明らかになってきました。今回の研修会では、炭素年代測定法の実験と千手観音菩薩像の制作年代や形状などについての講演を行います。

主催：白鷹町史談会
 申込・問い合わせ：
 白鷹町教育委員会 文化振興係 (tel 0238-85-6146)
 ※研修会に懇親会を行いますので、参加希望の方は2月25日(火)までにお申し込みください。(会費2,000円)

講師
長坂一郎 先生
 東北芸術工科大学
 芸術学客員教授・文化財保存修復学 教授
 /文化財保存修復研究センター センター長
岡田 靖 先生
 東北芸術工科大学
 文化財保存修復研究センター 専任講師

平成25年度の研修会を下記のように開催します。

白鷹町史談会研修会

観音寺観音堂(深山観音)の本尊・千手観音像の放射線炭素年代測定法検査からわかること

- 1 期日 平成26年3月1日(土)
- 2 時間 午後1時30分から4時まで
- 3 場所 白鷹町中央公民館
- 4 講師 長坂一郎先生(東北芸工大)
岡田 靖先生(東北芸工大)
- 5 参加料 無料
※2月25日(火)まで、下記に御連絡ください。

白鷹町教育委員会 文化振興係
 tel 0238-85-6146

- 6 その他 研修会終了後に懇親会を行います。(会費2,000円)

■ キノコの話一件

丸川二男

先頃、深山観音堂の本尊の成立年代を探るための調査が行われたが、その調査も一段落した頃、仲間の菅野さんが「寒いので先に帰るから・・・」とあって帰りかけたが、しばらくして「前に車が止まっていて動けない」と戻ってきた。そして、手に白いキノコを持って「いい匂いがするが、食えるものか、わからないか」といつてきた。近くの林の中に、この間降った雪が残っているかと思うほど、一面に出ているというのである。

むろんキノコについては素人であり、ナメコ、シイタケぐらいしかわからない。もちろん山のキノコは匂いや形で判断などできないが、それでも食べるように見えて「塩ゆでして食べてみたら・・・」といった。調査が終了後で菅野さん、住職の最林寺さんと林の中に入ったら、白くて大きな傘を広げたキノコがやぶの中のあちこちに出ていて、まさに雪が残っているように見えたというのも誇張ではない。

帰り足で役場に寄ったが、名前は誰もわからない。杉林の中だからスギカノカでは・・・と思ったが、それは朽ちた木から直接出るといし、軸がないという。また、イクチは色が違うという。チチタケの類が似ているというが、折っても乳が出てこない。ただキノコらしい芳香だけがムンムンするだけで、食べられるものかも定かでない。



写真には色がついているが、現物は乳白色である。こうなると、自ら食って確かめるほかはない。仮に腹が痛くなったとしても、自分の腹である。以前も似たようなことがあった。その時は確かムラサキシメジというキノコで、一人で食べたが実にうまかった。

やり方はこうである。まずキノコを塩ゆでして一口食うのだが、かならず目の前の時計を見ていることで、二十分から三十分ぐらい様子を見る。それで何もなければまた一口食う。また様子を見る。キノコの毒はまず吐き気と下痢だ

というから、自分の腹具合に変化があるかは、自分でわかるはずだ、というのが私の流儀である。そうやって二個のキノコを食べたが、なんともなかった。翌日に四個を生醤油で食べたが、やはり吐き気もなかった。菅野さんや最林寺さんとは会わなかったが、おそらくうまく食べたのだろう。それであちこちの知人に配る気になったのである。

私がキノコのことによって思い出したのは作家の坂口安吾で、高校で習った現代国語の教科書の中に「ラムネ氏のこと」という評論があった。彼はその中で、キノコ取りの名人が自ら取ってきたキノコを食って死んだが、その最後は思い当たることがあったように素直な往生だったという話を書き、キノコに毒があるとわかったのはそういう人がいたからだということである。自然にあるキノコは見た目がうまそうに見えても毒の有無は、外からはわからない。昔はいちいち化学的な分析を頼むなどということはなかっただろうから、食って命を落とした人がいたのであろう。おかげで毒キノコの存在がわかっているのである。

もっとも私などが仮にそうなっても「あいつは賤しいから・・・」ということで、話にもならないだろう。ところでこのキノコの正確な名称は、後日に「シロシメジ」というものだったことがわかった。以後、安心して食べることができたことは言うまでもない。

■ 布に関わる様々な植物のこと（４） 守谷英一

「刈安（カリヤス）」という染料にする植物がある。イネ科ススキ属の植物である。黄八丈の黄色に染める染料を八丈刈安と呼んでいるが、それは「コブナグサ」という植物で、イネ科コブナグサ属であるということなので、本当は刈安ではないようだ。

刈安のことを持ち出したのは、『米沢織物同業組合史』を読んでいたときに、米沢藩でも黄八丈を織っていたということを見つけたからである。なかなか黄色を出すのが難しかったのでキハダを使ったりしたということが書いてあった。

この辺りが織物のおもしろいところである。現在は化学染料が普及したため、それで染色したものはどこであっても、同じような調合をすれば同じような色を出すことができるだろう。自然の染料を使った場合はそうも行かないという。

その辺りが自然染料のおもしろさであろう。

先日、高名な染織家の吉岡幸雄氏（「染司よ

しおか」五代目当主）のお話を聞く機会があった。その中で吉岡氏は「草木染めをするのは、それが歴史の中で安定した染料だからです。化学染料は歴史の検証を受けていない。どうなるかわからない染料なので、自分は使わない。」ということ述べられた。蘊蓄に富むことばのように思う。染料に限らず、科学技術一般についてもこういう考え方が必要に思う。

たとえば原子力発電はどうなのか、使用済みの燃料の問題なども、こういう視点で考えなければならぬのではないかなどと思う。

植物の話の戻すと、十王の小松織物工房で薄い緑色に染められた織物を見せてもらった。刈安で黄色に染めた後、藍で染めたのだという。黄色に青だから、確かに緑になる。思いがけないところで「刈安」の名前を聞いたので、どんな植物ですかと聞いたら「カヤ」のようなものですよと教えられた。

米沢には「刈安」という地名がある。万世町で、米沢スキー場のある辺りである。そこにはカリヤスが自生していたのだろうか、とも考える。いまは雪の下に埋もれているので、雪が溶けたらいつてみようと思っている。

■ 「史談」のことなど

本会の会報の「史談」を編集集中です。とは言え、まだ原稿が全部集まっているわけではありません。特に、研究論文・調査報告がまだまだ少ないようです。

今回の丸川さんのキノコことや守谷が書いている布に関する植物のようなもので充分と思います。無理に難しいものにしない方がよいかと思います。どうぞ遠慮なくお寄せください。また、近況や雑感がまだの方々、ぜひお寄せください。

また、置賜民俗学会の『置賜の民俗』第20号が発行されました。特集は「置賜三十三観音信仰の今」ということで、平成25年6月30日に行われたシンポジウムを中心にしています。29番札所松岡観音の別当寺住職である菊地豊宗氏も参加しています。置賜三十三観音それぞれの説明も付いています。興味のある方は、会員の江口儀雄、守谷英一へ御連絡ください。

江口儀雄

85-2700

守谷英一

85-0371

090-8255-7763

1冊900円です。